

妻に叱られて②8

# 「お弁当」で妻に叱られた

土居 修



「学校で一番偉いのは私ですから」と、彼女は言っ

た。高知県立農業高等学校の校長室の一室、2021年4月末のことであった。足元に麗らかな春の淡い光が動いていた。開け放された窓の向こうには、紫色に変わりつつある遠い空が見えた。

彼女の意図するところが瞬時には理解できなかつた。校長って偉いのかなあとなんとなく考えていると、ああ、この人は肩書でしか生きることをできないのだなあと思えてきた。その人間性に嘆息した。他人がそれをいうなら許容できないこともないが、本人が発するべきことはではない。日本の伝統精神の衰退か。美德とは無



縁の生き方が私の眼に映っていた。おかしくもあり、哀れでもあった。

「肩書とは誰が偉いかを決めるものではなく、その人が組織の中で果たすべき『役割』を示します」は、アクサ生命社長兼CEO安瀬聖司さんのことば。彼女の精神風土からすれば、容認することは到底できないにちがいない。だが、と考えた。周辺に諫める人物がひとりでもいたならば、彼女は裸の王様になっ

ていなかっただけではないか。私には私を叱る妻がいる。私の美德はそれに由来しているといっ

てよい。彼女の来し方に思いを馳せていると、ひとつことわざが不意に浮かんできた。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」。直後に、高退協事務

局のみなさんの顔が次々から次へと流れていった。彼らはみな「実るほど頭を垂らに埋めけり」の生き方をしている。なんとこの衝撃が一瞬にして私を4月当初の最初の職員会議に巻き戻している。

「私は今年で退職です。なぜここに着任したのか、私自身もわかりません」臆面もなく挨拶をする彼女を啞然として眺めながら、あはれとちやうか、このひとは、憐憫の眼差しを送っていた記憶。しかしながら、このひとはいつか衝突するかもしれないという予感を覚えていた。時間にして数十秒。現実

に立ち返ったとき、いつしか空は血のような色を帯びていた。「私の方針には従ってもらいます」

相手よりも上位にあることで威圧し、自分の意思通りに人を動かそうとする人物とはあくまで対峙するしかない。私を屈伏さ

せてみよと憤激した。あの日から二年と九か月の月日が流れているが、あの日、あのとき、あの場所、そこにいたおのれを今もこよなく愛おしいと思っている。「農場でのデータ採取は、雇用契約書には記載されていませんよ」

「でも、学校のことば私がきめるのですから」

憤怒の川を渡りながらも、男の美学の命ずるままのおのれであるうと決めた。男の美学はその看板を下ろしたときから、単なるわがままになってしまふ。

「そうした業務は前校長からも聞いていない。そうであれば、この話を受けられるわけがない」「どうしても、だめですか」「諦めるしかありませんね」

少しぐらひは、と思った。引き留めてもいいのでは

ないか。ゴミくずか、俺は。だが、彼女には微塵もその雰囲気はなかった。自身の意に沿わない人間をこのようにして切り捨ててきたにちがいない。彼女の人生に素漠としたものを視た。暗澹とした思いに沈んでいった。

「僅か1か月で職を去るという展開。多大な迷惑をおかけすることは重々承知してはいますがと謝しながら、その場で退職願を書いた。終業時間を迎え帰途に就く。春宵の空を映して流れる悠久の大河仁淀川が見えてきた。思わず、義理と人情を秤にかけて、やはり義理が重たいのさと殴り込みをかけた高倉健さんの世界観を美しいと想った。翻って私自身はどうか。狂



気じみた男の美学を貫くことは身のほど知らぬの倨傲(おこり高ぶること)であろう。だが、従順と倨傲を迫られたとき、私は躊躇なく後者を選ぶ。「背中(せな)で吠えてる唐獅子牡丹」は私も散らすわけにはいかない。

土佐市の街並みを薄暮のなかに捉えたとき、不意に妻の顔が浮かんできた。ともに暮らしてはじめて30有余年、数限りなく叱られてきた。またしても、という感懐が募る。我が身の不徳を呪うしかない。アクセルを踏むことが億劫になつていった。

台所に立っている妻の背中に向かって、今日の顛末を話した。包丁を使っている手を休めることなく、「しょうのない男ね、まったく」振り返った妻の右手に白刃が光っていた。なぜか、校長室の窓の向こうに見える空を思い出した。「じゃあ、もうお弁当は要らないってどう」とね「思いもかけないことばであった。ふたたび、包丁を使い始めた妻。まな板の上で玉ねぎが無残に切り刻まれている。「お弁当をつくる楽しみがなくなつたじゃないのよ、ばか」

文句のひとつやふたつ、咎めることはもない。ただ弁当をつくることができな